社会調査という関係と感情経験：ラポール・感情ワーク・実践

崎山　治男[i]

本稿は，社会調査という関係における感情経験の位置について論じたものである。これまでの社会調査論では良好なラポール関係を形成するための肯定的な感情経験のみが論じられ，特権化されてきた。それに対し，否定的な感情経験やそれに対する感情ワークもまた，調査という関係で生じるばかりでなく，調査対象や調査という関係の理解に通じるものとして位置づけなおすべきである。また，そこで経験される感情中立的だけではない自己の複数性を記述すべきである。これらの点では，調査という関係性は必ずしもそれ自体が特殊性を帯びたものではなく，日常生活のそれの延長線上にあるものである。そのことを前提とした上で，調査という営みが持つ実践的志向や課題解決といった特異性が問いなおされるべきである。これらの点について感情社会学の視点と対話構築主義という視点から論じられる。

キーワード：ラポール，感情ワーク，対話的構築主義，調査と実践

はじめに－社会調査という構え

社会学や社会福祉学の登場と，社会調査という営みの誕生とはほぼ同時期に登場したものであったといっても過言ではないだろう。社会学や社会福祉学の源流をたどるならば，たとえばウェーバーやデュルケムが社会学を制度化し成立させた際にあった，近代社会に潜む病理を問う際にとられた方法。あるいは，ウエッブ夫妻の業績にみられるような福祉改良主義。このように，社会学や社会福祉学は，近代社会が持つ病理を診断し，何らかの改善をはかるためのツールとして，社会調査を必要とした。そして社会調査の成果をもって制度化された学術領域になったといえるだろう。

その後の社会調査の歴史は，大きくは調査を支える諸制度や方法論の整備と改良の下，量的調査と質的調査のどちらが社会のリアリティを切り取れるかという点をめぐる神々の闘争や，調査者の価値判断の中立性や権力をめぐる議論が理論的には展開されてきたといえよう。

もちろん紙幅の都合上それらの論争や理論上の問題の全てを紹介することはできない。また，特にそれらから議論を始めることも本稿では控えたい。なぜなら，社会調査という営みを行い教育する際にまず直面する実感という始原に立った事柄や，それを社会的成果として還元し，実践的な課題に貢献していくことが強く求められる今日的な状況に沿って社会調査という営みを考えていきたいからである。

まず，この点について私の専門とする質的調査[1)]からふりかえっていきたい。第１の実感は，その充実。私が学部・大学院教育を受けてきたわずか20数年の過去と対比してみても社会調査士の制度化とあいまった社会調査科目は充実した。社会調査士認定機構が2003年度に発足し，その中でＡ群の社会調査の基本的事項に関する科目からＧ群の社会調査を実

ｉ　立命館大学産業社会学部准教授

際に経験し学習する科目までの７科目を受講することが定められた。ふりかえると，私あたりが社会調査の実地主義や経験主義のみですまされ，また格闘してきた最後の世代となるのかもしれない。調査論は洗練されつつ細分化され，その具体的な方法論も充実し，それらへのアクセスは格段に容易になった。またその中で，特に量的調査・質的調査に関する方法論の相違についての一定の調停が進み，さらには特に質的調査でも哲学・人類学・心理学等の手法を取り込んだ方法論へと洗練されつつある[2)]。

これと相反する，第２の実感が，驚くべきことに(私だけかもしれないが)その貧困。もちろんそれはこの20年余りに急速に進んできた調査論の理論レベルでの貧困のことではない。むしろ，社会調査が社会調査士制度として確立し，調査論・調査技法論へのアクセスがかつてに比べて良くなっているにも関わらず，調査を行う・あるいは教育する際にまず抱いてしまう違和感や不安のことである。

たとえば調査実習という制度の中でわれわれは，調査対象地・対象者の選定を行い，それに即した調査方法の選択を行い，調査を行う。あるいは，調査研究に際して自らの問題関心に即した調査対象を選定し，調査手法を選択し，調査を行う。その際にとられる方法そのものだけをとるならば，前述したように，近年の科目・教科書の整備は大きな助力となろう[3)]。

だが，それでも，実際に調査を行う際に必ずしも科目・教科書の記述に収まりきらないことに直面する。特に調査対象者と関係を取り結んでいく際に具体的にどうしていけばいいのか？という不安である。またそれは，調査を進めていく中で調査対象者との関係の中で生じる自己の変容や対象者が持つ実践的な課題にいかに向き合っていくべきか，という問いでもある。

こうした調査という関係を築く中で，私たちは調査対象者との関係性[4)]にセンシティブにならざるをえない。つまりは，調査対象者との関係の持ち方やそこで自らが感じる感情経験，研究そのものが調査対象者の実践的課題に応えうるか否か，といった点にとまどいや反省を感じ，そこで自己がいかにあるべきかという課題に直面するのではないだろうか。

この点は，既存の調査科目の制度化や，テクストの充実だけでは解決されない面を持つ。確かに，さまざまな社会調査の制度やのテクストでもこうした点について参考になるヒントや注意すべきポイントは書かれている。だが他方で，それらで解消されることのない自らの調査での関係性や感情経験，実践的課題との向き合い方といった問いはどうしても残ってしまう。

少なくとも私が，実際に調査を行う際，あるいは調査に関して教育を行う際に困難を感じる点は，ここにある。これらの点に向き合いつつ調査の技法を高め続けることが良い調査者であるという自己認識はあり，また社会調査論の中でも語られる。だが他方で，たとえば佐藤が「どのような技法を使って調査をおこなう場合でも『場数』を踏んでいく」ことでしか身につけることが出来ない部分は非常に多い」［佐藤，2015a, p.51］と語るように，確かにもっともではあるが，調査の方法や教育がしばしば秘儀的なものとなったり，経験主義に傾いたりしてしまう。ふりかえってみるならば，これらの課題は社会調査を行う側の一方的な構えによるものだけではない。調査という営みと調査対象者との関係，対象者の私への関心の移り変わりによるものでもあり，それにどのように対処していくべきかというものでもある。

この調査対象者との関係の中でのとまどい・感情経験・実践という課題について本稿では，まず，調査対象者との関係の起点となるラポールという概念を出発点にしながら考察を進めていきたい。その上で，こうした調査対象者との関係と密接に関係する調査対象者との関わりの中で揺れ動く感情経験や調査者としての自己のあり方について考察を進める。そして，近年の質的調査の流行の中で，調査という営みが調査対象者に持つ実践的な効果をいかに自らのものとして引き受けるのかを論じていく。

1．調査の作法：ラポールという関係をめぐって

まず，現在ある調査論の中で，調査の作法としてのラポールがどのように語られているのかをみていこう。欧米圏の社会調査論の代表的な教科書とされる『社会調査の考え方』［May, T. 2001=2005］では，調査対象者が調査に協力する信頼関係をはぐくむものとして，ラポール関係が語られている。「インタビュー法では，インタビューされる人の視角を理解できるように方法そのものが設計されている。そのため，ラポールを確立することがこの上なく重要」［ibid, p.188］であり，そのためには，①説明を求める質問（＝調査者の意図や関心について開かれている段階），②探り合い（＝互いの人物やインタビューの進行が分かる段階），③共働（＝互いの期待への理解が進む段階），④参加（＝調査対象者の調査への積極的な協力が得られる段階）という四つの段階を追ってラポールを確立することが重要だとされる。

また，日本の社会調査論の代表的な教科書である『社会調査法入門』［盛山，2004］では，「対象者との関係のもち方のことを『ラポール』ということがある。ラポールの重要性は，質的調査を中心としてよく強調されているが（中略）基本的には次のように考えればいいだろう。第一に，当該の調査研究がけっして単なる私的な利害関心だけではなく，学術ないし実務の公共的な価値にも関わっているという認識のもとで調査にあたること。第二に，にもかかわらず，調査対象はあくまで調査者のみにとっての課題であって，対象者がそれに協力するということは対象者の調査者に対する一方的なボランタリーな援助だということをけっしてわすれないこと］［盛山，2004，p.143-144］がラポール形成に際して重要だと取り上げられている。

これらから伺われる，調査者－調査対象者間の関係を約言するならば，調査対象者の不安や距離感を取り払いながら，敬意を払いつつ調査者との良好な関係を作り上げていくことが要求されている。また，それを通して調査仮説・課題を常に練り上げ，更新しつづける「共同行為」こそが社会調査法の核であり［似田貝，1996］，それが，「現場研究の面白さ」［岩田他編，2006, p.112］として語られる。

確かにこうした関係が望ましいものであることは間違いない。だからこそ，調査関係の中でラポール形成に向かうことをまず志向する。クラインマンらは，その際の振る舞いと自己の感情経験のあり方や調査技法について以下のように論じている。

> 普通，親密な関係では，共感から憎しみにいたるまでの幅広い感情が生じます。しかし，調査協力者たちと親密な関係になる際には，ただ善意だけしかもちえないように思います。よい感じばかりで過ごしてもいられなくなり，感じ方の規則に違反すると，感情移入の能力がないことで私たちは自分を責めるものです。自分が調査協力者たちをもっとよく理解すれば，きっと彼らが好きになるに違いないと自分に言い聞かせるのです。
>
> 私たちはすぐにラポールを打ちたて，次いで親密な絆を打ち立てられるだろうと思います。（中略）はじめは，私たちは目立たないように心がけ，感情も平常に保ち，控えめに，人を脅かさないように行為します。気まずくなったり，フィールドから追い出されたりしないですむようにすることをしっかり学びます。このように調査のはじめでガードを固める以外は，積極的に調査協力者との親密な関係を結んでいこうと思います。こうした考え方からは，気持ちの持ち方を二段階で変えるというモデルが読み取れます。それは，不安で距離をとろうとする短い時間のあと，（ほとんど）瞬時にして親密さが生じるというものです［Kleinman & Copp, 1993=2006, pp.76-77］。

このようにラポールを形成することは良きものとして語られ，その際に私たちは調査対象者との関係の中で自他の感情を操作するさまざまな感情ワークを行っていこうとする。それそのものは調査にあた

っては確かに好ましいものであろう。だが，それが一種の呪縛として作用することはないだろうか。

まず，実際に私が社会調査やその教育に携わった際には，これにとらわれたことが確かにあったように思われる。つまり，前述したようにラポール関係を築きあげことやその社会調査の方法そのものは，もちろん，調査の課題と調査対象者の性質に左右される面が大きいので抽象的にならざるをえないのだが，ラポールが称揚される一方で具体的なノウハウは乏しい。その中で，ラポールを作ることのみに関心が集中し，その方法のよりテクニカルなものへの要求が生じたことがある。その際私は，学生の不安に応えるという半ばやむをえない事情から，自己紹介・挨拶の仕方・名刺の出し方・最初の話の切り出し・自己の開示の程度，等々のマニュアルを作成したことがある。しかしその内容は，いわば社会常識に近く，われわれが日常生活の中で無意識に行っているものを，調査対象者向けにアレンジしたものに過ぎなかった。そうであるがために，逆にかえって物足りなく感じさせ,「これだけですか」といった言葉にみられるように学生の不安をあおったことがある。

だが，逆に述べるならばこうしたラポール形成のための手法は半ばは日常の相互行為の延長であり，それを通してラポールは構築されてゆくよりないものでもあろう。クラインマンらは，ラポール形成の重要性と同時に調査という実践が日常生活の延長線上にあり，そこではさまざまな感情ワークが用いられていることを受け止めることがまず必要であるとも説く［Kleinman & Copp, 1993=2006］。ラポールをただ「良きもの」として概念化し，調査という関係を特別視するのではなく，そこで感情ワークが用いられていることをまず認めること，そしてその実態を明らかにさせていくことが重要なのではないだろうか。

また，ラポールの過小とも呼びうる事態もありえるだろう。このこと自体は，古くから研究者の立場性や関係性の課題とされてきたが，近年特に質的調査研究が一種の流行となり，かつ調査論のテクストや質的調査を元にした成果が流通するにつれ，それとは別の形で生じているように思う。

一般に流通している調査論，調査を元とした成果では，ラポール形成の不十分さといった調査の失敗は通常語られない。せいぜい懐古的に語られるのみである。自戒を込めてではあるが，研究者であれば成果をあげるため，そして調査の専門家としての面子を維持するために，論文・著書といった形では失敗経験がなかなか語られない。この学問的には真っ当ではあるだろうが，一般的には奇妙な構えが調査の実施や教育の場では悪しき効果を発揮しているように思われる。

典型的な例をあげるならば，調査論や調査を成果にした書物，あるいはそれをたずさえた（かのように見える）教員を前にして，ラポール形成の失敗を語れなくなることがある。また，あるいは語ったとしてもその「失敗」について, われわれが助言し, 対処することが困難になる構図がある。私自身の例をあげるならば，書籍や論文としてまとめられた自らの調査研究の成果が，教育に際してラポールの「成功」の成果としての権威を持ってしまうかもしれない。また，自戒を込めてとなるが，仮に学生・院生が調査対象者にそもそも接近しそこねる，あるいは関係が途切れた際に相談を持ち込まれた際，私自身は，調査対象への接近とラポール形成そのものが困難であるといった一般論，あるいは逆に調査対象への問題関心をさらに掘り下げ, アプローチを変え, 接近を続けることといった事柄を，自らの調査を元に語るしかない。だがそれがある種の経験主義として「とりあえず丁寧に粘り強く」としか語れない, あるいは受け止められないという事態もあった。

もちろん，丁寧に考察していけば，調査設計の可否や調査対象者の事情，調査時の自己提示の仕方などの事柄から，ラポール形成の可否がどのように生じたかを探ることも可能であろう。しかし，最終的には何らかの意味でパーソナリティや調査を行った経験に依拠せざるをえないこともある。私自身，質

的調査について十分なトレーニングを受けたことはなく，半ばは「やりながらマスターする」といった方法をとらざるをえなかったし，また，そのように伝えるしかない。その中で，私を含め，多くの学生・院生がラポール形成にあおられていき，また，そこで挫折することへのためらいをみせる。ラポールという概念が先行して調査で目指される関係とされる一方で，その「失敗」の社会学が存在しないことが，こうした構図を産んでいるように考える。

さらには，ラポールの過剰，あるいは調査者との関係で生じてしまう共感等の自己の感情にどのように対峙するのか，という問題もある。一般的な社会調査のテクストでは，そうした要素を排除した態度が要請されている。この点についてクラインマンは，自らの調査者・教育者としての社会調査者の養成課程をふりかえりつつ，調査者が専門的であるために客観的・合理的な態度，感情中立的な態度を持つことが必要であり，それが学問の権威を守るものとされてきたと批判的に指摘している［Kleinmann, 2002］。その上で，むしろ「調査対象者を理解するためにどのように感情を利用しているのか」［ibid, 379］という方法論が必要だとしている。

この視点に立った上で，実際の調査での感情の利用はどのようなものであろうか。前述したように，ラポール形成に際しては，自身や調査対象者の感情経験を肯定的なものにしていくことが求められ，その意味での感情ワークを行っている。その中で，感情中立性を調査の場や教育で押しつけることは，慎まれるべきであろう。なぜならばそれは，調査という関係でのリアリティとして経験される自己感情からはるかに遠ざかったものであるからである。

では，どのような関係を取り結べばよいのか。まず重要なことは，ラポール形成から調査に至るまでの関係の中でさまざまな感情ワークが行われ，肯定的・否定的な感情経験を経験することを認めることだ。この点について，クラインマンは，社会調査の教育において，「調査者の感情がバイアスとなり，データから排除されるべきものであるという通念を壊すよう学生に求める」［Kleinman, et.al. 1997, p.479］中で，共感・怒り・シニカルな態度等の感情を例にとりながら「感情をデータとすることが調査対象者へのさらなる洞察や仮説に結びつく」［ibid, p.481］としている[5)]。このように，感情ワークを行いつつ調査という営みが行われており，その中でさまざまな自己感情が経験されることを認めることこそが重要である。その中でこそ，「適切」なラポール関係を保ち，調査の内容を豊穣なものにすると同時に自らの調査時の経験を無理なく引き受けつつ，その変容への気づきへとつながるのではないだろうか。

2．社会調査における自己の位置づけ

このように，自らの調査時の感情ワークを関係構築の際の方法の一つとして認め，かつ自己のあり方の起点として意識化することにより，調査者の自己のありようは単に感情中立的だけではない多重性を帯びる。ここでいう自己の多重性というのは，調査者－被調査者の関係の中で，ある経験や関係への多重的な解釈がなされうるというホルスタインらの構築主義的視点等の影響を受け［Holstein, J.A. & Gubrium, J.F 1995=2004］，調査時の語りが再構築され続ける中で自己も再構築され続けるという，桜井らが提唱する対話的構築主義という意味に近い［桜井，2002］[6)]。その中で，特に調査時の感情ワークに注目することはどのような意味があるのだろうか。

調査時の感情ワークは，もちろんそのように名付けられることはないにせよ，いくつかの特徴は，調査論において議論されている。たとえば，前述したような私の経験に見られるような調査時のいわば社会常識に類似した方法に見られるように，調査の開始の仕方や，同意・相づちの方法，終わらせ方については，調査の技法として語られている［桜井，2002，桜井・小林編 2005等］。ここではさらに，調査の技法としてだけではない意味について検討を進めていきたい。

対話的構築主義の中では，調査という関係が単に，

調査者が調査対象者に聞くことで「事実」が明らかになるというスタンスではなく，調査者－調査対象者双方の応答の中で調査時のリアリティが構成されることが強調される。だからこそ，両者の関係の非対称性に注目しつつ,「警察官の尋問のよう」な調査もあれば［桜井，2002］,「インタビュアーの権力が強い場合，語り手はインタビュアーの聞きたいストーリーを語る傾向があるといわれる。それに『わざわざ遠くから来た大学の先生に手土産でも持たさないと』といった, 語り手の心遣いもある」［桜井, 2002, pp.258］といった調査もある中での自己のありようや感情経験への配慮にも一定の注意を払うものでもある。このように，調査者－調査対象者の関係に応じてさまざまな配慮，感情経験がうごめく中で調査時の感情ワークをどのように位置づけるべきなのだろうか。

まず真っ先に否定されるべきは，これまで述べてきたようにそれをなきものとしてしまうことだろう。前述してきたように，これまでの調査論においてはいわば感情中立性を保つこと，せいぜいが肯定的な感情ワークを行っていくことが，ラポールの形成と調査の「客観性」を保つために強調されてきた。もちろんそれは，ラポール形成を通じた調査の深化や調査倫理等の面から重要なことではある。

だが実際に調査を行う際の感情経験は，そうしたものだけに留まらないだろう。調査という場面でのとまどいや違和感，あるいは調査対象者への共感や嫌悪，といったさまざまなものが含みこまれるはずだ。

それらの感情経験は調査にとって時にはバイアスとなるかもしれない。だが他方で調査対象に対する自らのスタンスを教えてくれると共に，対話の中で構築される調査の中でそのリアリティともなる。また同時に，調査対象者を少なくとも自身が知る際の手がかりともなる。この点についてクラインマンらは，感情経験を知ることが自らの認識・志向性を知る足がかりともなり，また対象への認識・志向性を知る手がかりともなるとするホクシールドの感情のシグナル論［Hochshild, 1983］を重視している。その上で，調査対象者への共感，没入，嫌悪，回避といったさまざまな感情を抱くことを意識することは, 自らの調査者へのスタンスを改めてふりかえらせると同時に，調査対象者の意味世界への理解をより深めるものであるとしている［Kleinman, & Copp, 1993=2006］[7)]。

そしてそれは，くりかえし行われる調査の中で自身への反省性を高め，かつ調査者との対話の中で構築されるリアリティを，より非対称性が少なくかつ「正確」なものへと導くことへとつながるだろう。調査という営みにおいて，調査者が，そして調査対象者が双方共に感情ワークを行っていること，そしてその中で双方に対して持つ感情経験が多様であることを認めることは，調査対象のみならずそれに対する自己の構えをも含めた記述を豊かにすると同時に, 調査という関係を特権的なものに据えないことにもつながる。それは，客観的中立性を装うことから生じる「啓蒙主義的前提」［山田，2011］を離れ，対話を通して教え，教えられる関係［桜井，2002］へと導くものであり，また調査の度に変容する自己を引き受け続ける態度へとつながるものであろう。

だが，自戒を込めつつ私の経験したことで述べるならば，過度に客観的であろうとし，また社会学の方法論に忠実にこだわる傾向があったように思う。それは自らが習得してきた社会科学の分析手法へのこだわりがあり，そのため調査対象者との距離感を測ることの難しさがあり，いわば啓蒙主義的態度にこだわってきた面もあったように思う。

だが，それは社会科学の概念・分析手法をただ放棄すればよい，という問題ではないだろう。社会科学の概念・分析手法を当てはめればある種の解が出てくるにもかかわらず，ある程度それを放棄して事例記述に徹したり，その中から実践的な効果をも導き出したりしようとする傾向が近年の質的調査にみられるのは確かである。しかし，私はむしろ社会科学の概念・分析装置を用いることを支持するし，問題の根は後述するように，こうした対立構造に起因

するものばかりではないと思う。

社会科学の概念・分析方法は，特に何らかの形で構成主義的な立場を導入することによってある種の「冷たさ」を持つ。それは，調査対象者の意味世界を何らかの形で切り取るものであり，それを一つの分析・概念へと回収してしまう側面を否が応でも持つ。また，実践的な課題に十分に応えきれないように映ることもある。

社会科学の概念や分析方法に過剰に適応しようとする構えは，前述した調査者－調査対象者の関係や調査対象者の意味世界を十分に記述できない，という帰結をもたらしていくように思う。前述したように，調査という関係性や調査対象者の意味世界でなされる感情ワークは，調査者にとっても，また調査対象者にとっても豊饒な意味世界を持つ。だからこそ，社会科学的な分析を十全に行うことができないものだとある種の割り切りを行わざるをえない。つまり，社会科学の研究者としての志向を持つ自己と，記述し実践する志向を持つ自己の分裂がもたらされ，両者の調停を，後者を前者に回収することによって達成する。そして社会調査はそもそもそうした権力性をはらむものだとする。

もちろん，逆の事態もありえる。記述し実践することを重視する立場に立つならば，調査対象者への共感と同一化を行い，記述し実践する自己を優位なものと位置づける立場もあるだろう。私自身は自らの調査においても，教育においても経験したことはないが，この立場に立った場合であっても，調査対象者の意味世界を十全に記述し実践へと導くことはできたとしても，社会科学の方法論を適用するという点では引き裂かれた自己を感受するだろう。

こうした過度な社会科学の方法論の遵守，ないしはその拒絶という問題は，これまで本稿で論じてきたラポールの過多や過小といった問題とは異なる。そこで主として主題化されてきたのは，対象者との関係性の濃淡によって，記述の内容や価値判断が変わったり歪められることであった。それに対して，ここで論じているのは，社会調査がある特定のリアリティを切り取り理論化するという営為であるがゆえに，実践的課題をめぐって複数の自己を感受し，そのいずれに立つかという問いである。

また，ここで論じている事柄は，単純に調査論で論じられてきた価値判断の問題とも異なる。価値中立性という命題にせよ，コミットメントという命題にせよ，調査者の自己の複数性といった問題ではなく，いわば認識の構えの問題であった。それに対して，ここで論じている事柄は，自己が実践的な課題に対して持つ違和感をどのように処理するのか，という問題である[8)]。

こうした問題は，特に人文科学や社会科学が実践的な課題を達成することが求められていく近年の流れの中で，ますます登場してくるであろう。それに対する正確な処方箋として定かなものを，現段階の私は持ち合わせていない。ただ，ここで記述してきた複数の自己の調停を見いだしていくことが一つの方途ではないか，と考える。以下ではこの点について，いくつかの素描を試みる。

3．「現場」と調査する自己との調停に向けて

こうした自己の分離をもたらす別の要因として，調査対象者との架橋としての実践をめぐる認識があるように思われる。実践家－研究者という図式と完全には重ならないにせよ，大まかな傾向としては，社会学・社会福祉学における実践を重視する立場は，政策提言というマクロなレベルから，地域・家族での福祉やソーシャルワークのシステムの「改善」といった直接的な効果が念頭に置かれている，あるいは置くべきだとするものが多い［古川，2004，岩田編，2006，三島，2007等］。それに対して社会学・社会福祉学における理論と方法を重視する立場は，ある語りや振る舞いの構築性の暴露，あるいは調査そのものを通して実践の不備を浮き上がらせる間接的な効果を目指すものが多いように思われる［石川他編，1997，桜井，2002等］。

そのいずれが有効であるかを問うことは，本稿の

意図ではない。むしろ，両者の志向の内実を見る中で，用いられる調査方法の内実や意図を明らかにしつつ，前述した複数の自己の調停への考察を深めていきたい。

まず，前述した意味での直接的な効果を目指す実践的な志向を仮に「解決」志向と名づけよう。その際の認識構造は基本的には以下のようになる。何らかの意味で，改善すべき「現場」が確固たる存在としてある。調査を行う際，その設計は１つには現場の声を可能な限り拾い上げ，その「実態」を明らかにし，改善することが求められる［尾崎編，2001等］。質的調査においても，対象を与件とし，それとの相互作用の循環を重視するグラウンデッド・セオリーや，対象者との共働を重視するアクション・リサーチ［矢島，2010］が好まれるのも，こうした事情によるのだろう。

他方，前述した意味での間接的な効果を目指す理論的・方法論的志向を仮に「論理」志向と名づけよう。その中で近年提唱されている，構成主義的な潮流を意識した調査理論における認識構造は以下のようになる。何らかの意味での関心を共有した，調査者－被調査者が存在する。調査を行う際，その設計は単に被調査者の意味世界を与件のものとして探索するのではなく，調査者－被調査者との対話の中で確定されていく構築物であり，それこそが「現場」である。もしそれを実践に生かすならばその構築性の暴露がもたらす現実の異化効果，あるいは対話プロセスの中での意識化である。典型的には，対話的構築主義やいわゆるラディカル構築主義と呼ばれる調査法がそれにあたる。

現状では，前者からみると，構成主義的な潮流を意識した「論理」志向は，改善すべき実態としての現場からの乖離であり，実践に貢献しないものだと見なされがちである。他方，後者からみると「実践」志向は，しばしば自らの立場に無自覚な啓蒙主義的な態度だと見なされがちである。こうしたことは，理論的には構成主義が提唱され，論争がくりかえしなされてきた中で常に登場する課題であり，実際に私が調査実践や大学院教育において経験していることでもある。

こうした対立構図を不毛なものということはたやすいし，これまでも認識論的な立場，実践への関与の性質等々の相違からくりかえしいわれてきた。だからといって，反復することが全く無意味だということではない。双方が議論をくりかえす中で，「解決」志向の場合には，グラウンデッド・セオリーの深化や記述の積み重ね，実践的な課題発見といった洗練，「論理」志向の場合にはナラティブ・アプローチの組み入れなどにより，一定程度その臨床性を重視する方向への転回がそれなりになされてきたといった成果はある[9)]。

その上で，どのようなさらなる架橋が可能であろうか。まずもっとも容易に思いつく方途は，現状を追認する形での棲み分けであろう。

それは，今，現になされている形での「現場」や実践への関与の相違をそのまま追認し，「解決」志向の社会学・社会福祉学と「論理」志向のそれとの境界を明らかしつつ，協働する方向でもある。それが不可能である，ないしは好ましくないという議論は，もちろん方法論における認識論の相違はあるが，成立しないようにも思える。

それに向けて，本稿の冒頭で述べた，社会学・社会福祉学の歴史を遡及的に再解釈しつつ，社会学・社会福祉学が元来持っていた，社会問題の発見と解決に向けた学であることを再確認する方途もまたある。その中で「解決」志向の社会学・社会福祉学と「論理」志向のそれらの持ち分と効力を再認識することも，それ自体として過ちであるとはいえないように思われる。

さらに，前節で述べた調査と実践的効果に関する複数の自己を調停していく方向もあるだろう。その意味ではそれぞれの実践的効果をより意識化する方途もありえるように考える。その手がかりとなるのが，前述した「現場」のとらえ方の相違である。前述したように，「解決」志向の社会学・社会福祉学において主として「現場」というタームから想定され

るのは，それが日常生活とはかけ離れた場であって，たとえば社会福祉の制度内外で行われている実践であり，それに対して調査を行うことであった。他方，「論理」志向の社会学･社会福祉学において一方，社会学において「現場」というタームから想定されるのは，もちろん実践の中の諸制度も含み込むが，誤解を恐れずにいうならば，日常生活の諸実践全てが当てはまる。

このような「現場」という概念のとらえ方の異動という傾向から読み取れることは,「論理」志向の社会学・社会福祉学の立場から見るならば，日常生活の諸実践の反復と延長線上にこそ調査という関係性がある，ということである。換言するならば，調査という関係を特異な実践と捉えず，日常生活のそれと同様の振る舞いが行われている可能性を見いだしていこうという構えである。一方,「解決」志向の社会学・社会福祉学の立場からみるならば，あくまでも調査という関係性は日常生活の諸実践に還元されない側面を追求するという構えである。

こうした構図を前にして，両者の視点と実践的課題への構えをふりかえりつつ，自らがいずれを選び取るかを明確にすることがまず重要であるだろう。その上で，これまで述べてきたような自らの志向を定め，調査という関係がなお持つ実践的課題へと向き合うことこそが求められているのではないだろうか[10)]。

終わりに

本稿では，調査関係における困難について，ラポールという関係を持つことが称揚される際の陥穽や，調査関係における感情経験を中心に考察を行ってきた。その主張を大別するならば，以下のようになる。

第一には，調査論の過剰とその貧困。これは既存の社会調査制度や調査論の内容の問題ではない。むしろ，調査論が容易に入手され，科目が制度として整備されてくればくるほど，反転的に調査論として語られる普遍的な事柄と，個々の調査の固有性との調停が求められ，その帰結として，ある種の経験主義と質的調査の秘儀化が進行することであった。近年において，特に質的調査論においてさまざまなノウハウが語られるが，それらに対する「失敗」の社会学が存在しても良いと考える。

第二には，調査者自身の感情と自己の処理の方法。これまでの調査論の多くでは，良好なラポール関係の形成に向けた，感情中立的・あるいは肯定的な感情経験が提唱されてきた。もちろんそれそのものは必要ではある。だが，調査という関係性においては，多様な感情ワークが実際に行われており，また必ずしも肯定的な感情経験ばかりが経験されるわけではない。そのプロセスを明確化すると同時に，調査という関係性における感情経験や感情ワークには，それが調査という関係性の形成ばかりではなく，調査対象者の意味世界と自らの志向を知り，調査の内容を豊穣にしていく方法の一つとして正しい位置づけが与えられるべきである。

このことが，調査者の自己の分離という問題にも結びつく。調査という関係はそれがある側面で感情ワークという特性を持つがゆえに，調査を行う側にも調査者への共感や思い入れ・巻き込まれ，あるいは距離化という態度を抱かせる。その中で調査関係の中での実践的な課題を意識させられ，それへの態度を決めかねる契機をはらむ。その際に，どのように実践的課題へと切り込むか，本稿の言葉を用いるならば「解決」志向を目指すのか,「論理」志向を目指すのかは，人文科学や社会科学の実践的成果が問われる昨今の潮流の中で大きな課題として調査者に突きつけられるものであろう。

このことは，第三の論点としてあげた「解決」志向の社会学・社会福祉学と「論理」志向の社会学・社会福祉学のいずれを探るのかという内的な調停の可能性とも結びつく。前者は,「現場」を調査対象者と調査の特異性があるものと措定する。一方，後者は「現場」という概念を日常生活のそれと同一の機制にあるものとして解き明かそうとする。両者の溝は確かにあるが，まずその中で調査という関係と日

常生活との連続面と切断面が明らかになる。

このことを調査という関係性という論点から捉え返すならば，日常生活と連続性を持ったものとして調査関係を捉え，そこでの感情経験から調査対象者へと同一化したり異化したりする自己や，実践への関わりへと揺れ動く自己を受け入れることへとつながる。誤解を恐れずにいうならば，調査という関係とそこでの自己・感情を特権化せずに，日常生活の延長線上にありうる事柄として受け止めていくことが大切なことであるといえよう。その上でこそ，はじめて調査という場面に固有の関係性，自己のありよう，感情経験，実践的課題への志向を考察するべきだと考える。

従来の調査論や，調査研究を元にした成果では調査という関係やその対象となる現場を特権化し，日常生活とは異質なものとして論じてきたきらいがある。もちろん，それそのものは間違いではない。ただ，社会調査の実践を秘技化することなく教育を進めていくという＜下＞への広がり，あるいは実践家との共同といった＜横＞へと拡げていくためには，日常生活との向き合いという別様の地点から出発する構想も必要ではないかと考える。

注

1） - もちろん，質的調査といっても今日ではそれを一括りにできない方法論と理論的背景がある。対象の実在性，関係の権力性，分析関心のタームなどにおいて一方では論争がなされつつ，乱立しているのが現状といえよう。詳細は桜井の論考［桜井，2002, 2003］や盛山の論考［盛山 2004］，佐藤の論考［佐藤 2015a，佐藤 2015b］等を参照のこと。

2） - 註１で述べたように，そもそも質的調査の制度化と洗練は，調査されるリアリティの実在論や構成論といった哲学的な議論，あるいは対象者の文化の翻訳と接近可能性をめぐる文化人類学的な問いに論理的な起源を持つものでもある。また同時にたとえば質的調査論の１つであるナラティブ・アプローチの手法に関しても医学，社会学，心理学といった諸領域が交差する中での検討が進んでもいる。

3） - たとえば，近年刊行されたものだけでも質的調査に関する入門書の数々［工藤他，2010，谷・山本 2010］は，この意味で参考になるものである。

4） - 調査者との関係にまつわる権力性，という視点もまた幅広い。日本での議論に限定しても，古くはいわゆる「似田貝－中野論争」として注目されてきた，調査者の啓蒙的態度の問題や［似田貝，1974，1977，中野，1975a，1975b，1975c］，被調査者への実践を考慮に入れない「調査地被害」［宮本，1986］といった問題から，「調査」という営みそのものが統治・統制と親和性を持つことを指摘したものまである［田中耕一･荻野昌弘編，2007］。

5） - このような，調査対象への意味理解に果たす役割と異なったベクトルとして，感情社会学では自らの調査時の感情を記述・分析すべきだ，という立場もある。たとえば，エリスらがそれまでの感情社会学が感情の認知化を促進してきたこと等を批判し，調査者－被調査者の「生きられた感情経験」(lived emotional experience) を相互的に記述する「感情的社会学」（emotional sociology）を提唱する［Ellis, 1991a, 1991b, 1995等］。私はその実践例を示しつつ，調査方法としては一定の有効性を持つものの，かえって自己感情のみを価値化する危険性があると示唆した［崎山，2007b］。

つまり，ここで述べたいことは感情を調査の手がかりの唯一なものと価値化するのではなく，調査論の中に正当な位置づけが与えられるべきだ，ということである。

6） - 対話的構築主義とは，いわゆる社会構成主義の立場に立ち，調査される対象を調査者が切り取るというグラウンデッド・セオリー等の「解釈論的アプローチ」に立たず，調査という関係の語りの中で調査者，調査対象者それぞれの自己や調査対象者が構築されるという立場である［桜井，2002等］。

7） - このように，調査時の自らの感情を明らかに記述していく方途について，私自身は以前「感情公共性」という概念を元に，自らの感情経験を明らかにする中でこそ調査関係がより深く切り結ばれ，かつ調査対象者の意味世界への理解を高める可能

性を指摘した［崎山, 2012］。それに対して本稿では特に調査時の感情ワークに注目し，調査時の感情経験は，自己や対象者との関係の変容をもたらすものであり，それをなきものとして否定しない調査者のありようを提示している。さらに，その上で社会調査教育や調査に際しての実践的な志向・課題に対して調査時の感情のありようの自己認識が持つ肯定的な効果について論じている。

また，近年の対話的構築主義の中では，調査時の応答のプロットにおける自らの認識や感情経験を記す中で，そこで構成される語りを分析するものも多い［桜井・石川編 2015等］。そこでも，自らの語りを分析に導入することの意義として，自らの立ち位置への反省を通した調査対象者の意味世界への理解や，分析を第三者へと開かれたものとする意義が主張されている［石川，2012］。

8）　- これまで記してきた調査時のラポール形成や，揺れ動く自己の位置づけと調停といった課題は，もちろん研究倫理上の制約とも関わりはある。「適切」なラポール形成に向けた構えは堅持していくべきであろうし，自他の感情ワークや感情経験を記述・公開する際には調査対象者からの了解は必須となろう。

9）　- もちろん, いわゆる構築主義的な立場に立つ理論全てが実践的・解決的な志向を持たないわけではない。近年の社会問題論の構築主義的展開の中では，臨床現場への心理主義的な処方箋を目指すものも多い［崎山，2007a］。また，たとえば物語論の分野等においても, 自己物語の書き換えや, マスター・ナラティブへの異化効果などを目指すものもある［野口 2005，McNAames, S. & Gergen, K.J. 1997=2014等］。

10）　- この点に関連して佐藤は, 理論－データ－方法のマトリクスを描き，そのどれかに過剰なものを調査設計や実践の不備として論じている［佐藤，2015a］。しかし，いずれかに偏重しながらこの 3 者のバランスをとることを進めていくのが調査という営みなのではないだろうか。

文献

Ellis,C.1991a “Sociological Introspection and Emotional Experience”, *Symbolic Interaction*, 14-1, pp.23-50

——1991b “Emotional Sociology”, *Studies in Symbolic Interaction,* 12, pp.123-145

—— 1995 *Final Negotiations: A Story of Love, Loss, and Chronic Illness*, Temple University Press

Ellis, C. &Flaherty, M.G. 1992 “An Agenda for the Interpretation of Lived Experience”, Ellis, C. & Flaherty, M.G. (eds.) *Investigating Subjectivity*, Sage., pp.1-13

古川孝順 2004『社会福祉学の方法：アイデンティティの探求』有斐閣

Hochshild, A.R. 1983 *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press.

Holstein, J.A. & Gurium, J.F.1995 *The Active Interview,* Sage.=2004山田富秋他訳『アクティブ・インタビュー：相互行為としての社会調査』せりか書房

石川淳志他編 1997『見えないものを見る力；社会調査という認識』八千代出版

石川良子 2012「ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義：インタビューの対話性に注目して」『年報社会学論集』25, pp.1-12

工藤安則他編 2010『質的調査の方法：都市・文化・メディアの感じ方』法律文化社

Kleinman, S. & Copp, M.A. 1993 *Emotion and Fieldwork*, Sage.=2006 鎌田大資・寺岡伸悟訳『感情とフィールドワーク』世界思想社

Kleinman, S. et.al. 1997 Qualitativery Different: Teaching Fieldwork to Graduate Student”, *Journal of Contemporary Ethnography*, 25, pp,469-499

Kleinman, S. 2002 “Emotions Fieldwork, and Professional Lives”, May, T. (ed.) *Qualitative Research in Action*, Sage. pp.375-394

岩田正美他編，2006『社会福祉研究法』有斐閣

May, T. 2001 *Social Research 3rd edition,* Open University Press=2005, 中野正大監訳『社会調査の考え方：論点と方法』世界思想社

McNames, S. & Gergen, K.J. 1997 *Therapy and Social Construction*, Sage.=2014 野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー：社会構築主義の実践』金

剛出版
三島亜希子 2007『社会福祉学の＜科学＞性：ソーシャルワーカーは専門職か？』勁草書房
宮本常一 1972→1986「調査地被害」『宮本常一著作集31』未来社，pp.109-131
中野卓 1975a「社会的調査における被調査者との所謂『共同行為』について」『未来』102, pp.28-33
――1975b「社会学的な調査の方法と調査者・被調査者との関係」『未来』103, pp.28-33
――1975c「社会学的調査と『共同行為』」『UP』33, pp.1-6
似田貝香門 1974「社会調査の曲がり角：住民運動調査後の覚え書き」『UP』24, pp.1-7
――1977「運動者の総括と研究者の主体性（上・下）」『UP』55, pp.22-26, 56, pp.28-31
――1996「再び『共同行為』へ：阪神大震災の調査から」『環境社会学研究』2, pp.50-62
野口裕二 2005『ナラティヴの臨床社会学』勁草書房
尾崎新一編 2002『「現場」のちから：社会福祉実践における現場とは何か』誠信書房
桜井厚2002『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房
――2003「社会調査の困難」『社会学評論』53-4, pp.452-470
桜井厚・小林多寿子編 2005『ライフストーリー・インタビュー：質的調査入門』せりか書房
桜井厚・石川良子編 2015『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』新曜社
崎山治男 2007a「社会病理診断と介入のはざまで」『社会学評論』57-4, pp.821-829
――2007b「感情社会学という暴力：生きられた感情経験をめぐって」『立命館大学産業社会論集』43-3, pp.25-36
――2012「社会と感情が交差する地点に向けて：＜生存＞との対話を通して」『生存学』5, pp.206-216
佐藤郁哉 2015a『社会調査の考え方＜上＞』東京大学出版会
――――2015b『社会調査の考え方＜下＞』東京大学出版会
盛山和夫 2004『社会調査法入門』有斐閣
田中耕一・荻野昌弘編 2007『社会調査と権力＜社会的なもの＞の危機と社会学』世界思想社
谷富夫・山本努編 2010『よく分かる質的調査：プロセス編』ミネルヴァ書房
山田富秋 2011『フィールドワークのアポリア：エスノメソドロジーとライフストーリー』せりか書房
矢守克也 2010『アクションリサーチ：実践する人間科学』新曜社

Emotional Experiences in Social Research: Rapport, Emotional Work, and Practice

SAKIYAMA Haruo[i]

Abstract : This paper discusses the position of emotional experience in the context of social research.

Social research theory has only discussed and privileged positive emotional experiences to form good rapport relationships. Negative emotional experiences and emotional work on them, on the other hand, should not occur only in the context of the social research process, but should be repositioned as being relevant to understanding the subject of research and the relationship of social research. It should also describe the multiplicity of self that is experienced there, not just emotional neutrality.

In these respects, the research relationship is not necessarily peculiar in itself, but an extension of those of everyday life. On that premise, the peculiarities of research activities, such as practical orientation and problem solving, should be re-questioned. These points will be discussed from the perspective of sociology of emotions and conversational constructionism.

Keywords : rapport, emotional work, conversational constructionism, practical orientation of social research

i Associate Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University